

# 例 言

## 1. 掲載資料の範囲

- (1) 本書には、2004年度までに、奈良文化財研究所がおこなった発掘調査で出土した陶硯のうち、平城宮跡出土資料を収載した。平城宮と平城京との区分は、便宜的に、隣接する道路の側溝までを宮域に含めて取り扱うことを原則としたが、調査区が両者にまたがる場合に、出土地点によって厳密に両者をわけることはしていない。平城京および寺院出土の陶硯については、『陶硯集成Ⅱ』として公刊の予定である。
- (2) 本書に収載した資料は、出土資料533点である。同一個体の可能性が高いが、接合しないものは原則として別個体として扱い、写真図版にはその全点を示したが、実測図では合成したものがある。
- (3) 原則として蹄脚円面硯や圈足円面硯などの定形硯を対象とし、転用硯、「猿面硯」は除外した。また、石製硯も除外した。

## 2. 陶硯の分類、名称

- (1) 陶硯の分類については、基本的に以下の分類の大別に従い、付図に示す分類、名称を適用した。既刊の報告や先行研究で使用されている細分、名称を括弧内に記したのものもある。  
山中敏史 1983『埋蔵文化財ニュース41 陶硯関係文献目録』  
奈良国立文化財研究所 1976「陶硯」『平城宮発掘調査報告Ⅶ』  
神野恵・川越俊一 2003「平城京出土の陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸問題』 奈良文化財研究所

## 3. 資料の掲載順

- (1) 資料は平城宮跡発掘調査部が行なっている調査次数順に掲載した。次数内では原則として蹄脚円面硯、圈足円面硯、その他の順に配したが例外がある。異なる次数間で接合する個体については、後の調査に含めることを原則としたが、例外がある。

## 4. 図版の体裁

- (1) 写真の縮尺は、約2分の1を原則とし、ほかの縮尺を用いる場合は、写真の左下に示した。
- (2) 実測図の縮尺は3分の1である。

## 5. 本書の作成

- (1) 資料の整理は都城発掘調査部長 川越俊一の指導のもと、考古第二研究室が担当し、西口壽生、玉田芳英、高橋克壽、森川実、小田裕樹がことにあたった。資料整理および図版の作成には今津朱美、岡本真実、岡本由佳子、橋爪朝子、福田清美、丸山美和が協力した。
- (2) 掲載した写真は奈良文化財研究所の牛嶋茂、中村一郎、鎌倉綾の撮影による。
- (3) 第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章の執筆および第Ⅳ章の作成は、川越、森川、小田の協力のもと西口が担当し、編集は川越俊一の指導のもと、西口が担当した。